

玉座を飾った障壁画 ～〈大広間〉一の間・二の間～

本年度は、寛永行幸から400年目にあたることを記念して「シリーズ寛永行幸400年」と題し、行幸時に使用された二の丸御殿の部屋の障壁画をご紹介します。二の丸庭園の南側に設けられた行幸御殿は、後水尾天皇(1596～1680)を迎えるために造営されたもので、主な行事はこの御殿を中心に行われました。一方、二の丸御殿は、〈大広間〉の南側に設けられた舞台上上演された能の観覧席として、また、公家や門跡らへの饗応の場として用いられました。

秋期は、能観覧の際に天皇の御座、すなわち玉座が置かれた〈大広間〉二の間の東西面と天皇の背後を飾った〈大広間〉一の間北面の障壁画を展示します。

玉座となった〈大広間〉二の間

二の丸御殿の中心に位置する〈大広間〉は、將軍との対面が行われる最も公的な棟です。対面の際、將軍は、現在「一の間」と呼ばれる上段に座し、一段低くなっている下段、すなわち「二の間」は、將軍の謁見に与る人々の座でした。このため、上段と下段からなる部分を対面所とも呼びます。しかし、行幸の際には、この対面所は本来の用途とは全く異なる役割を担うことになりました。

行幸に備えた二条城大改修の際に、二の丸御殿の南、〈大広間〉二の間の正面には、能舞台が設けられました。そのため、行幸四日目の能上演の際には、二の間に天皇と中宮、女院の観覧席に設定されたのです。『寛永行幸記』(以心崇伝著)に記された内容から、二の間と廊下の境は建具(戸襖)を取り外して御簾を掛け、御簾際の室内に、天皇、中宮、女院のために、それぞれ上畳と茵を敷いたことが読み取れます。

玉座を飾っていたもの

天皇の玉座となったのは二の間ですが、その背後には、一の間の大床や棚がありました。前述の『寛永行幸記』によると、大床には、中国南宋の画僧、牧溪筆の三幅対(中央が寒山拾得、向かって右に龍、左に虎)が掛けられ、大床の押板の中央には花梨製の台に銀製の花瓶、香炉、香枕、香合、香匙が置かれ、その両脇にも花梨製の台に銀製の花瓶が設置されました。大床の老松は、これらの飾りの背景になっていたのです。

さらに、二の間には、梨地時絵の台子(棚の一種)に黄金製の茶道具が飾られていました。〈大広間〉に飾られたこれらの道具は、行幸御殿の飾りや道具とともに、すべて天皇に献上されました。

一の間から二の間にかけては、大床だけでなく東西及び南の壁面にも大きな松が描かれています。廊下と部屋の境の戸襖や部屋境の襖が、採光等のためにすべて取り外されていたとすれば、西側と南側では松の絵の下半分が無い状態になりますが、残った長押上の壁面だけでも、黄金の背景に松と孔雀が印象的に浮かび上がる横長の画面となっています。二の間には、全部で六羽の孔雀が描かれています。そのうち二羽は壁面に描かれており、建具が撤去されても《松孔雀図》として成立していました。つまり、障壁画の筆者、狩野探幽(1602～74)は、対面所の使用時を想定して障壁画を構成したと考えられます。

二の間と三の間の境の襖の上は、二の間側を正面にして「桐に鳳凰」の

彫刻欄間となっています。鳳凰は、古代中国で出現した伝説上の吉祥の鳥で、日本にも古代からその概念が入ってきており、17世紀までには、「優れた皇帝が出現する予兆として現れ、梧桐にしか棲まず、竹の実しか食べない、百鳥の王」といったイメージが定着していました。優れた為政者と結びつくことから、戦国時代から城郭の装飾としても好まれたようです。二の丸御殿では、〈大広間〉とく黒書院の釘隠しにも「桐に鳳凰」の意匠が見られます。

また、万治2年(1659)造営の江戸城本丸御殿でも、大広間の下段と、その東に続く部屋の境に、「桐に鳳凰」の欄間があったと記録されており、二条城二の丸御殿と同様の位置関係にあったことになります。万治造営以前の江戸城については史料でたどることができないため、二条城の現存作例が先行するのか、江戸城に先例があったのかは未詳です。

孔雀と鳳凰

孔雀は、日本には生息しない鳥ですが、6世紀末に朝鮮半島から献上されたという記録があり、以来、江戸時代に至るまで、天皇や時の権力者への献上品として舶載されてきました。日本での飼育例も8世紀に遡り、平安時代には、藤原道長邸でも飼われていました。

美術工芸品に孔雀が表現されている例として、古くは正倉院御物があり、平安時代以降も、工芸品、彫刻、絵画等に用いられてきました。また仏教では、孔雀は毒蛇を食べるという言葉から、災いを除いて吉祥を招く鳥として尊ばれ、孔雀明王として信仰されました。

孔雀が屏風のような大画面に描かれるようになったのが確実なのは室町時代です。狩野元信(1476～1559)が、天文10年(1541)に周防(現在の山口県)の戦国大名、大内義隆(1507～1551)から、明への献上品として注文された金屏風の中には「月日桐孔雀鳳凰」を主題とするものが含まれていました。その屏風は現存しませんが、桃山時代に制作された伝土佐光吉筆《桐竹鳳凰孔雀図屏風》(クリーブランド美術館蔵)や伝狩野永徳筆《四季花鳥図屏風》(白鶴美術館蔵)は、孔雀と鳳凰が一对に描かれた金屏風であり、元信の屏風を考える手がかりになると同時に、室町時代から桃山時代にかけて、鳳凰と孔雀が対になって描かれることが稀ではなかったことを示しています。〈大広間〉二の間において、彫刻欄間と障壁画という形で、鳳凰と孔雀が揃っているのは、このような流れにつながるので

す。ところで、二の間の孔雀の中でも、もっとも印象的なのは、西側の長押上壁面に描かれた飛翔する孔雀でしょう。両翼を扇のように左右に開き、尾羽を左斜め上に伸ばして、首から嘴はS字を描いて左下を振り向きざまに見下ろす姿は、狩野派で蓄積されていた中国絵画の鶴の図像に基づいています。二の間の欄間のうち、向かって右から二番目の鳳凰も、反転させると同じような形であることに気づくでしょう。探幽が徳川幕府のために17世紀の中頃に制作したとされる《桐鳳凰図屏風》(サントリー美術館蔵)左隻の飛翔する鳳凰もまた、この図像のバリエーションです。

玉座となった二の間の、華やかな王者の鳥と吉祥の鳥が舞う空間だったのです。

松本直子(元離宮二条城事務所学芸員)